

生命を大切にする子どもの心を育てる看護者の役割

－保育者の関わりの実態をととして－

矢野智恵¹・中野綾美¹・益守かづき¹・岡本幸江³・今西一實²・山崎美恵子¹

(2001年11月5日受付, 2001年11月29日受理)

The Nurses' Role in Developing a Child's Attitude toward the Value of Life

－ Through an Investigation of the Actual Conditions of the Kindergarten

Teachers'/Nursery Caregivers' Participation in Developing Child's

Attitude toward the Value of Life －

Chie YANO¹, Ayami NAKANO¹, Kazuki MASUMORI¹

Yukie OKAMOTO³, Kazumi IMANISHI² and Mieko YAMASAKI¹

(Received : November 5, 2001. Accepted : November 29, 2001)

Abstract

The aim of this study is to find how the registered nurses participate originally in developing a child's attitude toward the value of life using their specialties, in cooperation with kindergarten teachers/nursery caregivers. For that purpose, we investigated the actual conditions of how the kindergarten teachers/nursery caregivers (who are professional and are concerned in bringing up children from infancy which is the most important period in developing their minds) interact with children and their parents.

For data collection we made an original questionnaire and 252 kindergarten teachers/nursery caregivers in N prefecture made valid replies. The collected data were analyzed with descriptive statistics, using statistic package SPSS.

The following characteristics of the kindergarten teachers'/nursery caregivers' participation in developing a child's attitude toward the value of life are found; (1) their participation is in the value of not so much the beginning of life (birth) or the end of life (death) as in the good rapport with life focusing on being born, (2) the participation takes delight in the growth of the children themselves or their friends rather than their good health, (3) the participation accepts the parents in the relationship between the kindergarten teachers/nursery caregivers and the parents and relieves them.

These findings suggested that it is possible for the nursing profession to participate originally in developing a child's attitude toward the value of life by encouraging a sound view of life, participating in the supporting group for the parents who are anxious about child-rearing, and promoting health education to the children and their parents.

Key word : Importance of life, sympathy, child, view of life, health education

1. 高知女子大学看護学部看護学科 Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University

2. 高知女子大学社会福祉学部社会福祉学科 Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, Kochi Women's University

3. 埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科 Department of Nursing, School of Health and Social Services, Saitama Prefectural University

I. はじめに

近年、我が国におけるいじめ問題や学級崩壊、少年犯罪など、子どもをとりまく深刻な問題はあつとを絶たず、社会的関心はきわめて高い。これらの子どもの問題は、現代の子どもの「死についての認識」や「生命の尊厳性」を軽んじる風潮の一端ではないかと危惧されており¹⁾、子どもの心を育てることの重要性がクローズアップされている。平成10年4月に、文部省（現：文部科学省）は深刻な青少年非行の状況に対応すべく、「幼児期からの心の教育の充実」に関する施策を重要課題とし、心の教育は幼児期からの取り組みが必要であることを前提として、子どもを取り巻く社会全体・家庭・地域・学校がそれぞれなすべきであるという教育改革プログラムを提示した²⁾。しかし、子どもの看護に携わる我々小児看護者は、専門職としてこの問題に関して、果たすべき具体的方策を未だ見いだしていないのが現状である。

今回、我々は心の教育の中でも特に、“生命を大切にする子どもの心を育てる”ということに注目した。生命を大切にする子どもの心を育てるために、どのような関わりをしているのかについての研究は、文献検索の中では見あたらなかった。そこで、心の発達上非常に重要な時期である幼児期の子どもに最もよく関わっている専門職である幼稚園教諭・保育士（本論文では、幼稚園教諭・保育士を保育者とする）が、生命を大切にする子どもの心を育てるために、子どもと保護者にどのような関わりをしているのか、その実態を明らかにし、保育者と協働して看護者が専門性を発揮し、どのような独自の関わりができるのかを見いだすことを目的として本研究を行った。

II. 文献検討

ここでは、生命を大切にする子どもの心を考えるうえで重要である“思いやり”を説明する際に用いられることが多い、向社会的行動の発達を概観し、生命尊重から見た子どもの現状の問題と、子どもをとりまく家族の現状、そして、生命を大

切にする心を育てるために取りくまれている実践の報告を概観する。

1. 向社会的行動（愛他的行動）の発達

心理学領域において向社会的行動は愛他的行動と同義的に使用され³⁾、思いやりの行動を説明する際に使用されている^{4)~6)}。菊池⁷⁾は、向社会的行動（思いやり）について①他者、あるいは他のグループについての援助行動である、②相手からの外的な報酬を得ることを目的としてはいけない、③行動には何らかのコストが伴う、④自発性が必要であると述べている。そして、Eisenbergの研究を紹介し、子どもの向社会的判断が一定の段階を踏んで発達していくこと、この発達が一般的な道徳性の発達よりもやや早いということを紹介している。そして祐宗⁴⁾は、幼児期における愛他的行動について、生活経験や訓練によって学習される学習性のものであると述べている。

向社会的行動、あるいは愛他的行動は、動機づけの過程で共感性が必要である^{3) 4)}。共感性を支える一番基本的な認知能力は4・5歳頃から急速にのびてくることが知られている⁷⁾ことから、幼児期から共感性を育む関わりが大変重要になってくることがわかる。

2. 生命尊重から見た子どもの現状の問題

警察庁生活安全局の「少年非行等の概要」⁸⁾によると、主要刑法犯で検挙された少年の人口比（少年人口千対比）は、平成10年は16.5であり戦後最高ではないが、平成11年の刑法犯少年凶悪犯（殺人、強盗、放火、強姦）の検挙人員は2,237件で、平成9年から3年間の検挙人員は2千人を超え、凶悪犯罪は高水準で推移している。その中でも特定罪種別検挙状況⁹⁾では、平成7年では154件であった人を死に至らしめる犯罪が、平成11年には207件となっている。そしてそのうち、殺人においては平成元年の116件をピークに、その後70~90件で推移しているものの、平成10、11年にはそれぞれ115件、110件となっている。

また、文部省初等中等教育局の「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」¹⁰⁾による児童生徒の自殺の推移を見てみると、昭和54年の380件をピークにその後減少傾向にあったが、平成9年度の133件に比べ、平成10年では192件と大幅に増加している。

平成9年度の文部省(現：文部科学省)調査¹¹⁾では、全国の公立小・中・高校生の暴力行為は、校内外合わせて約2万9千件で過去最多を記録した。そして校内暴力の発生状況¹²⁾を平成9年度と10年度を比較してみると、対教師暴力において小学校ではそれぞれ193件、192件、中学校では3,074件、3,629件、高等学校では430件、577件と中学校、高等学校で増加している。また、生徒間暴力においても同様に、平成9年度と10年度を比較すると、小学校ではそれぞれ624件、728件、中学校では8,873件、10,655件、高等学校では2,856件、3,333件といずれも増加している。

3. 家族機能の変化と育児不安の増加

少子化の急速な進行とともに、社会全体で育児の重要性に対する認識が強まる一方、子どもによる犯罪が報道されるたびに、家庭や学校の機能に異常が生じているのではないかという観点からの関心が高まっている¹³⁾。社会情勢の大きな変化に伴い、かつては親子の関係を中心とした①保護－非保護の関係、②運命共同体、③社会の入り口、④共同生活者、など従来の家庭の機能が変貌を遂げ、経済的豊かさや核家族化、地域社会の変貌(都市化)、価値観の多様化等の特徴による家族の凝集性の低下が指摘されている¹⁴⁾。また、物質的充足の問題が解決されるにつれ、家族員相互の情緒的精神的機能が期待される傾向が顕著となり、家族の弱体化が注目されるようになってきている¹⁵⁾。

このような中、母親だけにしつけの責任が課せられる傾向にある中から生じる母親の不安が指摘されており¹⁵⁾、母親の育児不安に関する研究も多く見られている^{16)~19)}。そして、近年における育児不安の特徴として「しつけ」「情緒面や性格の問

題」「教育」等への悩み・不安が強くなっていることが指摘されている²⁰⁾。

4. 生命を大切にする心の発達を育む取り組み

平成12年12月に教育課程審議会は、「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」を文部大臣に答申し、その中の提言のひとつとして、行動の記録の評価の内容に「生命尊重」が新たに加えられた²¹⁾。学校教育においても生命尊重の教育の充実が必要であり、早急に取り組むべき課題であることを、この提言は意味しているのではないだろうか。実際に学校教育の中でも「生と死の教育」が徐々に広がっており、子どもたちが生命の尊さを考えるための取り組みもされては始めている^{22)~31)}。

また地域では、助産婦による小中学校を対象にした出前授業において、人間の誕生を中心にしなげながら生命が大切であるのかということをお教えたり³²⁾、相手の気持ちを思いやり、自分の怒りや衝動をコントロールして言葉で伝える技術を学ぶための「キレない子どもを育てる教育プログラム」を推進するための組織が設立されている³³⁾。

以上のことから、生命を大切にする子どもの心を育てるための取り組みには幼児期からの関わりが重要であること、生命尊重からみた子どもの現状の問題からも早急に何らかの取り組みが必要とされていることは明らかである。一方、子どもをとりまく家族の状況を見てみると、近年、家族機能の弱体化が注目されると同時に、子どものしつけの中心となる母親の育児不安の増加が多く報告されており、生命を大切にする子どもの心を育てる取り組みは家庭内だけでは限界があることが推測され、教育の場や地域でも様々な取り組みがされ始めていることが明らかになった。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象者の選択

人口80万規模の地方都市であるN県内の市立保

育園、民営保育園及び幼稚園に勤務する保育者を対象とした。各施設については、N市子ども課（市立保育園）、N県保育士会長（民営保育園）及び私立幼稚園連合会会長（幼稚園）より紹介していただいた。

2. 調査用紙の作成

調査用紙は、4名の保育者へのグループインタビューおよび文献検討を基に作成した。2名の元保育者にプレテストを行い、質問の表現方法の修正を行った。

フェイスシートでは対象者に関すること4項目、保育者の子ども観に関すること11項目、保育者の保護者観に関すること7項目、自由回答を設定した。子どもへの関わりに関する質問として、【子どもと生命の触れ合いを大切にする】5項目、【生命に関わる子どもの社会化を行う】7項目、【生命の大切さを教える】6項目、【健康の大切さを教える】3項目、【思いやり・共感性を育む】9項目、【子どもの生命を大切にする心の育ちを支える】4項目の計34項目を、保護者への関わりに関する質問として8項目を設定し、それぞれの項目で“かなりそうである” “ややそうである” “そうである” “そうでない” の4段階のリカートスケールで調査した。

3. アンケート配布方法およびデータ収集方法

研究への協力の有無を確認し、了承の得られた施設にアンケート用紙を郵送した。対象者にはそれぞれ無記名であること、研究への参加は任意であることなど文書を通して説明し、倫理的配慮を行った。同意の得られた対象者には郵送してもらい、園長および研究者に個人が特定されないように配慮した。

4. データ分析方法

統計パッケージSPSSを用い、記述統計にて分析した。

IV. 結 果

1. 対象者の特徴

252名の保育士・幼稚園教諭より有効回答を得た。年齢分布、性別、職位、は表1のとおりである。

表1. 対象者の背景

		度数	パーセント
年 齢	～ 24 歳	39	15.5
	25 ～ 29 歳	40	15.9
	30 ～ 34 歳	19	7.5
	35 ～ 39 歳	31	12.3
	40 ～ 44 歳	42	16.7
	45 ～ 49 歳	35	13.9
	50 ～ 54 歳	26	10.3
	55 ～ 59 歳	16	6.3
性 別	60 歳 ～	4	1.6
	女 性	243	96.4
職 位	男 性	9	3.6
	園 長	17	6.7
	主 任	37	14.7
	幼稚園教諭・保育士	184	73.0
	そ の 他	14	5.6

2. 保育者の子どもへの関わり

保育者が生命を大切にする子どもの心を育てるために、どのような関わりを行っているのかについて、以下のような結果を得た（表2）。

1) 子どもと生命の触れ合いを大切にする

【子どもと生命の触れ合いを大切にする】についてみると、約40%の保育者は、『自然と触れ合うことができるように関わる』『動物や植物の成長を子どもが見ることができるように関わる』『動物や植物との触れ合いを通して生命を実感できるように関わる』に“かなりそうである”と回答していた。また25.2%の保育者は『子ども同士で相談しながら動物や植物の世話をすることがで

表2. 保育者の子どもへの関わり

	質 問 項 目	かなりそう である	ややそう である	そうである	そうでない
子どもと生命の 出会いを大切に する	動物や植物との触れ合いを通して生命を実感できるように関わる	98 (39.8)	79 (32.1)	68 (27.6)	1 (0.4)
	自然と触れ合うことができるように関わる	100 (40.2)	79 (31.7)	69 (27.7)	1 (0.4)
	子ども同士で相談しながら動物や植物の世話をすることができるように関わる	62 (25.2)	78 (31.7)	92 (37.4)	14 (5.7)
	死んだ生き物にも触れ、生命の終わり(死)を体験できるように関わる	30 (12.2)	83 (33.7)	108 (43.9)	25 (10.2)
	動物や植物の成長を子どもが見ることができるように関わる	99 (39.9)	75 (30.2)	73 (29.4)	1 (0.4)
生命に関わる 社会化を行う	生命を大切にする態度を子どもに示す	125 (50.2)	65 (26.1)	57 (22.9)	2 (0.8)
	自然を通して生命が繰り返されてつながっていくことを話していく	31 (12.6)	91 (37.0)	109 (44.3)	15 (6.1)
	体験を通して、自分自身の生きる能力を高める	63 (25.6)	75 (30.5)	98 (39.8)	10 (4.1)
	生命の誕生を喜ぶ社会の儀式を子どもに教える	31 (13.3)	66 (28.3)	107 (45.9)	29 (12.4)
	お葬式など生命の終わり(死)に関わる社会の儀式を子どもに教える	8 (3.3)	50 (20.7)	106 (43.8)	78 (32.2)
	子どもに生命が永遠のものではないことについて折を見て話をしていく	16 (6.8)	50 (21.1)	112 (47.3)	59 (24.9)
	子どもに生命の誕生について話す	35 (14.5)	82 (33.9)	103 (42.6)	22 (9.1)
生命の大切さを 教える	紙芝居や絵本などで、生命の大切さを伝える	71 (28.5)	99 (39.8)	78 (31.3)	1 (0.4)
	子どもに生命はひとつしかなくて、大事なものであることを伝える	137 (55.2)	59 (23.8)	51 (20.6)	1 (0.4)
	子どもの日常生活の中で危ないことは何かを教える	161 (65.4)	39 (15.9)	46 (18.7)	0 (0)
	子ども自身や友達の成長を子どもと共に喜ぶ	109 (43.6)	71 (28.4)	70 (28.0)	0 (0)
	叩いたり、叩かれたりする(ぶつかり合う)中で、子ども同士がお互いに体験していく	95 (38.5)	79 (32.0)	66 (26.7)	7 (2.8)
	子ども自身や友達の健康を子どもと共に喜ぶ	61 (24.7)	81 (32.8)	99 (40.1)	6 (2.4)
健康の大切 さを教える	身体を動かす機会を作るようにしている	131 (52.6)	69 (27.7)	48 (19.3)	1 (0.4)
	子どものまわり(社会)でどんなことが起こっているのかを話して聞かせる	26 (10.5)	82 (33.1)	107 (43.1)	33 (13.3)
	健康を守るための生活習慣を教える	103 (41.9)	74 (30.1)	67 (27.2)	2 (0.8)
思いやり・共 感性を育む	子ども同士がトラブルを抱えたとき、一緒に解決策を考える	119(47.8)	72 (28.9)	58 (23.3)	0 (0)
	子どもが他の子どもに関心を持っていることを大事にする	135 (54.2)	67 (26.9)	46 (18.5)	1 (0.4)
	異年齢の子どもと遊ぶことができるように関わる	104 (41.9)	81 (32.7)	62 (25.0)	1 (0.4)
	子どもが泣いていたりするときに、どのように関わったらいのかを示す	75 (30.5)	98 (39.8)	71 (28.9)	2 (0.8)
	子ども自身もどんな感情を持っているのかを相手に伝えることを促す	104 (42.3)	80 (32.5)	61 (24.8)	1 (0.4)
	子どもが泣いているとき、怒っているときには、どんな気持ちでいるのか子どもの思いを代弁して他の子どもに伝える	114 (45.8)	78 (31.3)	51 (20.5)	6 (2.4)
	他の子どもの感情(思い)を子どもが感じ取れるように関わる	94 (37.8)	83 (33.3)	69 (27.7)	3 (1.2)
	子ども同士が遊べる場を提供する。 (幼稚園が終わった後も園の運動場開放している)	17 (7.2)	37 (15.7)	49 (20.8)	133 (56.4)
	子ども同士でトラブルが起こったときでも、危険がない限り、子ども同士が解決するのを見守る	68 (27.8)	99 (40.4)	76 (31.0)	2 (0.8)
子どもを大切 にする生命 の心を	子どものよいところをほめる	181 (72.7)	28 (11.2)	40 (16.1)	0 (0)
	子どものやる気を尊重する	147 (58.8)	62 (24.8)	41 (16.4)	0 (0)
	できないことができるようになることの喜びを育てる	151 (60.6)	60 (24.1)	37 (14.9)	1 (0.4)
	子どもの共感性を引き出す声かけをする	85 (34.4)	77 (31.2)	82 (33.2)	3 (1.2)

度数(%)

きるように関わる』に“かなりそうである”と回答していた。これらのことから、保育者は、子どもが生命を実感できるように、体験を重視した自然との関わりを大切にして関わっていることがわかった。また、『死んだ生き物にも触れ、生命の終わり（死）を体験できるように関わる』については、12.2%の保育者は“かなりそうである”と回答し、10.2%の保育者が“そうでない”と回答していた。他の項目で“そうでない”と回答した保育者が0.4~5.7%であったことを考えあわせると、保育者の子どもへの関わりは、“死”よりも“生”に比重をおいた関わりであることが示唆された。

2) 生命に関わる子どもの社会化を行う

【生命に関わる子どもの社会化を行う】についてみると、『生命を大切にする態度を子どもに示す』というモデル的な関わりは、過半数の保育者が“かなりそうである”と回答していた。一方、『お葬式など生命の終わり（死）に関わる社会の儀式を子どもに教える』や、『子どもに生命が永遠のものではないことについて折を見て話をしていく』など、死に関することについては24.9~32.2%の保育者は、“そうでない”と回答しており、約70~75%の保育者は関わってはいるものの、“かなりそうである”と回答した保育者はそれぞれ3.3%, 6.8%にすぎなかった。また、『生命の誕生を喜ぶ社会の儀式を子どもに教える』や、『子どもに生命の誕生について話す』など生命の誕生に関する項目についても、“かなりそうである”と回答した保育者はそれぞれ13.3%, 14.5%であり、“そうでない”と回答した保育者はそれぞれ12.4%, 9.1%であった。『自然を通して生命が繰り返されてつながっていくことを話していく』について、“かなりそうである”と回答した保育者は12.6%であり、“そうでない”が6.1%であった。これらのことから、保育者の関わり特徴として【子どもと生命の触れ合いを大切にする】と同様、生命の始まり（誕生）や終わり（死）に関す

る関わりよりもむしろ、「生きていること」を中心に関わっていることが示唆された。

3) 生命の大切さを教える

【生命の大切さを教える】についてみると、過半数の保育者は、『子どもに生命はひとつしかなくて、大事なものであることを伝える』に“かなりそうである”と回答していた。『紙芝居や絵本などで、生命の大切さを伝える』に“かなりそうである”と回答した保育者が28.5%であったのに比べ、『子どもの日常生活の中で危いことは何かを教える』に“かなりそうである”と回答した保育者が65.4%、『叩いたり、叩かれたりする（ぶつかり合う）中で、子ども同士がお互いに体験していく』は38.5%であった。これらのことから、保育者が生命の大切さを子どもに教えるときに、前操作期にある子どもの発達の特徴を考慮した、日常生活の中での実際の体験の中での関わりに関わり関わっていることがうかがわれる。また、子ども自身や友達の健康を共に喜ぶ関わりより、成長を共に喜ぶ関わりをしている保育者が多かった。このことは、成長発達過程にある幼児期の子どもの保育・教育に関わる保育者の特徴と言える。

4) 健康の大切さを教える

【健康の大切さを教える】についてみると、『身体を動かす機会を作るようにしている』に52.6%の保育者が、また『健康を守るための生活習慣を教える』に41.9%が“かなりそうである”と答えており、これらの関わりに“そうでない”と答えた者はそれぞれ0.4%, 0.8%であった。一方、『子どものまわり（社会）でどんなことが起こっているのかを話して聞かせる』に、“かなりそうである”と答えた保育者は10.5%であり、そうでないと答えた者は13.3%であった。

保育者は、社会のトピックスを話してきかせる関わりよりも、身体を動かしたり、生活習慣を教えたりする関わりをかなりしていることがわかる。このことは、この時期の子どもが身体を動かした

り、生活習慣を確立していくという発達課題を達成していくことが大切な時期であることも関係していると考えられる。

5) 思いやり・共感性を育む

【思いやり・共感性を育む】についてみると、過半数の保育者が『子どもが他の子どもに関心を持っていることを大事にする』に“かなりそうである”と回答していた。そして、『異年齢の子どもと遊ぶことができるように関わる』にも41.9%が“かなりそうである”と回答しており、少子化で同胞の少なさを反映した関わりであることが考えられる。また、『子ども自身もどんな感情を持っているのかを相手に伝えることを促す』や、『他の子どもの感情(思い)を子どもが感じ取れるように関わる』、『子どもが泣いているとき、怒っているときには、どんな気持ちでいるのか子どもの思いを代弁して他の子どもに伝える』など、子どもが気持ちを伝えたり感じ取ったりできるための関わりに、37.8~45.8%の保育者が“かなりそうである”と回答している。保育者は、この時期の発達の特徴でもある自己中心的思考の子どもに、相手の立場で考えられるような関わりを大切にしているといえる。

子ども同士のトラブルに関して、『子ども同士でトラブルが起こったときでも、危険がない限り、子ども同士が解決するのを見守る』では27.8%の保育者が、『子ども同士がトラブルを抱えたとき、一緒に解決策を考える』では47.8%の保育者が“かなりそうである”と回答しており、一緒に解決策を考える関わりに“そうでない”と回答した保育者はいなかった。

また、30.5%の保育者は『子どもが泣いていたるときに、どのように関わったらいいのかを示す』に“かなりそうである”と回答していた。保育者は、子どもの同士のトラブルに関して、危険がない限り見守りながらも一緒にという姿勢で関わりながら、子どもの思いやりの心や共感性を育む関わりをしていることがうかがわれる。

また、『子ども同士が遊べる場を提供する』について、56.4%の保育者が“そうでない”と回答していたが、これは運動場解放など園の方針に影響される関わりであるためであることが考えられる。

6) 子どもの生命を大切にする心の育ちを支える

【子どもの生命を大切にする心の育ちを支える】についてみると、『子どものよいところをほめる』、『子どものやる気を尊重する』、『できないことができるようになることの喜びを育てる』に約60~70%の保育者が、“かなりそうである”と回答していた。また、『子どもの共感性を引き出す声かけをする』にも34.4%の保育者が“かなりそうである”と回答していた。保育者は、子どもに生命を大切にするための直接的な関わりだけではなく、それらの心を育ちを支える関わりにもかなり関わっていることがわかる。

3. 保育者の保護者への関わり(表3)

『保護者に園での子どもの様子を話している』に58.6%の保育者が、『保護者の気持ちを受け入れるように関わっている』に44%の保育者が、『保護者の育児を尊重していくように関わっている』に22.4%の保育者が“かなりそうである”と回答していた。保育者は、保護者が知らない園での子どもの状況を理解でき、保護者自身が安心して育児に取り組めるような関わりの方針を持っていることがわかる。

また、『保護者からの育児相談に応じている』に“かなりそうである”と回答した保育者は26.8%、“ややそうである”“そうである”がともに34.8%であり、多くの保育者が保護者からの育児相談に応じる姿勢を持っていることがわかる。『保護者の育児を尊重していくように関わっている』に“かなりそうである”と答えた保育者は22.4%、『保護者の育児にアドバイスしている』では21.5%であった。一方、『保護者が困難に思っていることを一緒に解決していくように関わって

表3. 保育者の保護者への関わり

質 問 項 目	かなりそうである	ややそうである	そうである	そうでない
保護者を安心させるように関わっている	135 (54.0)	63 (25.2)	51 (20.4)	1 (0.4)
保護者からの育児相談に応じている	67 (26.8)	87 (34.8)	87 (34.8)	9 (3.6)
保護者に園での子どもの様子を話している	147 (58.6)	56 (22.3)	48 (19.1)	0 (0)
保護者の育児にアドバイスしている	53 (21.5)	101 (40.9)	81 (32.8)	12 (4.9)
保護者の気持ちを受け入れるように関わっている	110 (44.0)	80 (32.0)	60 (24.0)	0 (0)
保護者の育児を尊重していくように関わっている	56 (22.4)	103 (41.2)	89 (35.6)	2 (0.8)
保護者が困難に思っていることを一緒に解決していくように関わっている	77 (30.9)	90 (36.1)	81 (32.5)	1 (0.4)
保護者が他の母親と交流の場が持てるような橋渡しをする	28 (11.3)	93 (37.5)	102 (41.1)	25 (10.1)

度数(%)

いる』に“かなりそうである”と答えた保育者は30.9%であった。これらの関わりを見てみると“かなりそうである”から“ややそうである”“そうである”と肯定的な回答をした保育者は95.1~99.6%であった。これらのことから、多くの保育者は、保護者の育児を尊重しながらアドバイスをしたり、一緒に解決していく姿勢で関わっていることがわかる。

母親が身近で育児に関する悩みを共有したり、アドバイスをもらったりする機会が減少している現在社会の背景の中、『保護者が他の母親と交流の場が持てるような橋渡しをする』という関わりに関して、“そうでない”と答えた保育者は10.1%であった。

これらのことから、保育者の保護者への関わりの特徴として、保護者同士の交流を促す関わりというよりはむしろ、保育者と保護者の関係の中で保護者を受け入れ安心させる関わりをしていることが示唆された。

V. 考 察

今回、生命を大切にする子どもの心を育てるための保育者の関わりの特徴として、①生命の始まり（誕生）や終わり（死）よりも、「生」を中心とした生命への触れ合いを大切にしたい関わりである、②子ども自身や友達の健康を共に喜ぶ関わりより、成長を共に喜ぶ関わりである、③保護者同

士の交流を促す関わりよりはむしろ、保育者と保護者の関係の中で保護者を受け入れ安心させる関わりである、等が明らかになった。いかに、生命を大切にする子どもの心を育てることができるのかについては、保護者を中心として子どもをとりまくすべての者が考えるべき課題である。さらに、子どもをとりまく様々な専門職者が、互いの役割や専門性を尊重しながら協働していくことが重要であると考えられる。

ここでは、本研究結果で得られた保育者の関わりの特徴をふまえながら、生命を大切にする子どもの心を育てるための、今後の課題と看護者の専門性を生かした貢献、役割について論じる。

1. 健全な生命観の育みへの課題

生命を大切にする心を育てるための保育者の関わりをみると、子どもと生命の触れ合いに関して、自然の中で、子どもが生命を実感できる体験ができるような関わりを大切にしていることがわかった。

工藤³⁴⁾は、生命の大切さを感じるのは知識ではなく感性であり、それは体験を通して自ら感じとるほかはないこと、豊かな感性を育てるために飼育活動は欠かせないものであると同時に、飼育活動を通して死と出会うことは、死の意味について考えさせる大切な学習場面であると述べている。また、平成10年の厚生省児童家庭局による保育所

保育指針³⁵⁾の保育目標、および平成12年に全面改正された文部省幼稚園教育要領³⁶⁾の幼稚園教育の目標に、様々な体験を通して豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うという内容の項目が掲げられている。幼児期の子どもの保育・教育に携わる保育者はこれらの目標のもとで、子どもの体験を大切にしたい関わりをしているのである。

一方、多田納³⁷⁾は児童の生命観の発達に関する研究において、生き物との緊密な接触によって、生命の力強さや不思議さを感じながら育った子どもほど生命を尊重し、生物を愛護する態度が育ちやすいという研究結果を報告している。また、健全な生命観を身につけることは、自分以外の生命あるものの存在に気づき、生命の尊厳性について深く理解すること、ひいては自分、そして他人、さらに他の生物に対しての思いやりの態度を育て、すべての生命の尊重について考えるという上で意義があると述べている。このことから、生命を大切にする心の育ちを考えていくうえで、子どもが健全な生命観を身につけていくことは非常に重要であると言えよう。健全な生命観を身につけるといことはどのようなことであろうか。それはただ生命の始まり(誕生)・終わり(死)という生物学的な変化を知ることだけではなく、生命の始まりの神秘性や喜び、生命の終わりの悲しみなど子どもの心の中に起こる変化を子ども自身が感じることであり、生命の尊厳性について理解できることではないだろうか。しかし木谷³⁸⁾は、子どもをとりまく文化状況から子どもに生命の尊厳性の破壊と生命尊重の理念の崩壊の現象が起こっていることに警鐘を鳴らしている。

今回の調査において保育者は、自然の中で子どもが生命とふれあえる機会をもつことができるような体験を大切にしている一方、生命の始まり(誕生)や終わり(死)に関しては、それらの関わりに比べるとあまり積極的とはいえない傾向が認められた。生命の誕生については、学童期になると性教育の一環として子どもに働きかけられることが多い。しかし、幼児期の子どもについては、

同胞や飼育している動物の誕生などのきっかけがない場合、関わり方が難しいのではないだろうか。宮本³⁹⁾は、現代の社会では医学の発達や核家族化・少子化などから、子どもが身近な人との死別を実感する場や生との出会いを体験する機会が得られにくくなっているため、それらに変わる体験が必要であり、できる限り幼い時期から動物や植物の飼育や栽培などを通して死の体験を持たせることが、幼児期の子どもの未分化な発達段階において、健全な生と死の意識を育てる親の関わりとして重要であることを述べている。また佐藤ら¹⁾は、現代の子ども死の意識に関する研究において、生命の尊厳性を認識するためには死の有限性を認識させることが大切であり有意義なことであると述べているが、実際には、死別経験をした際に、死別の体験を大人から語ってもらう機会が少なくことを指摘している。現在の幼児期にある子どもの保護者にあたる世代もまた、家庭における身近な人との死別経験が少ない世代であり、どのように死について子どもに語ったらよいのかということがわからないのではないだろうか。

幼児期の子どもたちが、生命の始まり(誕生)あるいは終わり(死)を体験する機会が奪われ、最も身近な存在である保護者や保育者の意識的な関わりがなされにくい環境にあるということは、健全な生命観を育む上での今後の課題となるであろう。

2. 家族機能の低下と保護者の育児不安

様々な社会状況の変化からくる家族の弱体化が指摘されている¹³⁾中、最近は子どもとの関わりに戸惑い、子育てを上手にできていない保護者が多い、という保護者観をもった保育者は、子どもだけではなく、子どもの保護者にもよく関わっていた。

保育者は、保護者を安心させるように関わり、保護者の気持ちを受け入れるように関わっていた。保護者の育児へのサポート状況においても、保護者が困難に思っていることを一緒に解決したり、

保護者からの育児相談に応じたり、保護者の育児を尊重し、保護者の育児にアドバイスする関わりに関わり関わっていると答えていた。生命を大切にする子どもの心を育てるうえで、保護者の関わりの重要性はいうまでもない。保護者が安心し、ゆとりある気持ちで育児に取り組めなければ、子どもにも影響を及ぼすであろう。しかし、間違いが少ないことが優秀と見なされる価値観の中で育てられてきた最近の保護者は、子どもが自分の思いのままにならない状況の中で、子育てに悩み、自信を喪失していると言われている⁴⁰⁾。また、身近に相談者を持つことができず、子どものことを理解できない状況のまま育児が続けられ、子どもの発育がゆがめられてしまうかもしれないという危険も指摘されている⁴¹⁾。これらのことから、保護者の気持ちを受け入れ、保護者が安心できるような関わり方をしながら、育児に対しても押しつけをするのではなく、保護者の育児を尊重しながら一緒に解決しようとする保育者の関わりは、非常に意味がある。

また、保育者の保護者への様々な関わりは、多くの保育者が保護者自身に対して様々な働きかけをしていることがわかる。しかし、保護者が他の母親との交流の場がもてるような橋渡しをする関わりでは、そうでないと答えた者が他の項目より比較的多かった。このことから保育者自身が直接保護者に、積極的に関わろうという傾向にあることがうかがわれた。

巷野⁴¹⁾は、子育て支援において孤立化する危険のある母親に、友達をつくる機会を与えることの重要性を述べている。幼児期の子どもを持つ母親を対象に行った、子どものヘルスプロモーションに関する研究において⁴²⁾、同年代の子どもを持つ母親同士では悩みを共有することができるが、その時期を過ぎた母親から、“良くあることだから気にしなくてもいいのよ”、“お母さんはがんばってるじゃない”と自分の工夫を承認されることが、母親の自信回復に影響していることが述べられている。このことを考えると、保護者が安心できる

と同時に自信をもって子どもの育児に取り組めるためのサポートには、同年代の子どもを持つ母親、またその時期を過ぎた母親との交流も重要であることが考えられ、そのような母親（保護者）同士の交流の場がもてるような橋渡しの機会を設けていくことが大切であろう。

3. 生命を大切にする子どもの心を育てるための看護専門職の役割

ここでは、生命を大切にする子どもの心を育てるための子どもや保護者への関わりの可能性について、健康問題に携わる看護専門職の立場から考えてみる。

1) 健全な生命観の育みへの関わり

今回の調査では、保育者の幼児期の子どもへの関わりをみると、生命の始まり（誕生）や終わり（死）に関するものは、他に比べると積極的にはなされていない傾向にあることが特徴としてあげられた。我々看護者は、人の生命に関わる職業に携わっており、この問題に関して果たすべき役割も大きいと考える。

病院など施設での誕生や死が多くを占める今日、生命の始まり（誕生）や終わり（死）の場での関わりは重要であろう。例えば、子どもの誕生においては、同胞が自分の弟・妹の誕生がとても嬉しいことであること、すばらしいことであることを子どもの認知の発達に合わせながら伝えたり、新生児室などの隔離により限界はあるかもしれないが、同胞と触れ合える機会を意図的に設けることなどの関わりもできるであろう。また、宮本³⁹⁾は、幼児へのDeath Educationとして、子どもへの過度な不安や恐怖を与えないと判断されるような場合については臨終の場に子どもを立ち会わせる方が望ましいと述べている。そして、このような特別な時だけでなく、特に幼児は日常生活において見たり聞いたりする体験を通して「生と死」の意識を形成しているため、日々の積み重ねの中での親の関わりが重要な鍵であると述べている。

我々看護者は、施設における祖父母などの親しい家族の死の場面で、子どもがきちんとお別れできるようにセッティングしたり、そのような場を設けることができるような保護者への働きかけも時には必要であるのかもしれない。その場合、保護者に対してそのような関わりがなぜ大切なのかの説明も必要であろう。

小児看護に携わる我々は、他児の死に直面した子どもへの関わりも大切になってくるだろう。山村⁴³⁾は他児の死に直面した幼児期の子どもの様子について、亡くなった子どもの部屋をのぞきに行ったり、周囲にいる看護者の表情を見ていたり、看護者について回ったりしてなにが起きているのかを知ろうとしている行動がみられ、ひとり取り残された感じになること、また夜になれば不安になり様々な思いを巡らしていることを指摘し、できる限り子どもがしてほしいこと、子どもが求めていることを行うことが必要であると述べている。それと同時に、我々は子どもの生命観の育みという視点から、そのような場面に遭遇したときに、どのような関わりが可能であるのかについて考えていくことが今後の課題となろう。

また、地域においては、助産婦による小中学校への出前授業などの取り組みが報告されている³²⁾が、生命を大切にする心を考えるうえで重要であると考えられる向社会的行動が、学童期から急速に発達してくることを考えると、幼児期からのある程度の取り組みも重要であろう。例えば、生命の始まり(誕生)や終わり(死)に関する関わりにおいて、保育者が積極的ではない傾向にあることを考えると、専門職としての立場から看護職が保育園や幼稚園に出向き、直接的に子どもに関わっていくことも必要なのではないだろうか。また、同時に保護者に対しても、生命の始まり(誕生)や終わり(死)を子どもが体験できるように関わることの大切さや、具体的な関わり方を伝えたり、関わる上で保護者が困難に思っている事について相談にのるという役割も担うことが必要であろう。今後の課題として、子どもや保護者に対す

る看護専門職ならではの具体的なアプローチ論の開発が望まれる。

子どもの生命を大切にする心を育てるうえで必要な、健全な生命観の育みに関して、幼児期の子どもに関わるすべての者がそれらの重要性を認識し、互いにどのような役割を果たすことができるのかを考えていくことが必要であろう。

2) 育児不安を持つ保護者のサポートグループへの関わり

今回の調査において、保育者は、直接保護者に積極的に関わろうとする傾向があることがわかった。子どもの育児に対する専門職である保育者の関わりはもちろん重要性ではあるが、現代社会の中での育児の問題点として母親の孤立化が指摘されている⁴¹⁾中、どのようにすれば保護者同士の交流の場をコーディネートしていくことができるかを考えていくことも今後の課題であろう。

原田⁴⁴⁾は、同じような状況にある仲間や看護専門職との関わりが、幼い子どもを育てている母親にどのような意味を持つのかという記述的な研究の中で、サポートグループにおける母親の体験を報告している。母親はグループ体験の中から、保証を得ることによって自分を脅かす不安から解放され、心の安定感を得る「母親としての自己の保証」、育児書などからでは得ることができない、対人的な場における学習や、人との関係性の中から、子どもを養育してゆくために必要な知識や技術、育児の原動力を得る「子どもと生きてゆく力の獲得」、子どもの誕生を機にせばまっていた生活の中に突破口を見つけ、子どものためだけでなく、自分のための生活を新たに作りなおしていく「自分の生活を新たに作り直す」という体験をしていた。特に、「母親としての自己の保証」においては、同じような状況にある仲間に相談することでは解消されない子どもの健康に関する不安や心配事を、グループの中にいる素人ではない看護専門職に相談することによって大丈夫という確証を得る『専門家のお墨つきをもらう』ことによ

て獲得していたことは、我々は注目すべき事柄であろう。これらの体験は、どのように育児をすればいいのかわからない不安⁴¹⁾や、自分の時間がもてないことや周囲からの孤立感などへのストレス⁴⁸⁾をもつ保護者においては非常に重要であると言える。

看護専門職として、このサポートグループにどのように関わることができるであろうか。まず、乳幼児健診など健診の場を通して、養育期にある保護者に関わる機会は非常に多い。このようなサポートグループのメリットを十分に理解し、同じような悩みを持つ保護者のグループ形成に果たす看護専門職の役割は非常に大きいと考える。実際に、21世紀の母子保健の主要な取り組みを提示するビジョンである「健やか親子21」の中で、子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減への具体的な取り組みとして、母親自身が育児力を持つための学習の場としての役割を果たし、母親自身が子どもの発達の過程を認識し、自らが育児方法を生み出せる力を付けられるような機能を果たすような健診のあり方の見直しが検討されている⁴⁵⁾。そして『専門家のお墨つきをもらおう』で明らかになったように、サポートグループに継続的に関わりながら、子どもの健康問題への相談者としての役割を果たしたり、時には健康問題に対する専門的知識についての情報提供も重要であろう。

3) 子どもと保護者への健康教育の推進

子どもの日常生活習慣を整える事ができるのは昔の保護者に多いという保護者観を持った保育者は、子どもへの関わりにおいて、健康を守るための生活習慣を教えたり、体を動かす機会を作るなどの関わりにかなりそうであると多くの者が答えていた。また、保育者の関わりの中でも、子ども自身や友達の成長を子どもと共に喜ぶ関わりに比べると、子ども自身や友達の健康を子どもと共に喜ぶ関わりがやや少ない傾向にあった。これは保育の専門職である保育者の特徴であろう。

幼児期は、日常生活習慣を身につける最も大切

な時期であり、周りの大人の関わりが非常に影響を及ぼす。現代の子どものヘルスプロモーションに関する研究⁴⁶⁾において浮かび上がってきた現代の子どもの問題として、不規則な生活時間による睡眠時間の減少や生活リズムの変調、食事時間の不規則さ、運動を伴う遊び時間の減少とともに生活様式の都市化に伴う運動量の減少などが指摘されている。そして、子どもの健康観と子どものヘルスプロモーション行動は相互に関連しており、子どもがポジティブな感情を高めることの重要性和同時に、親のヘルスプロモーション行動が子どもに影響をしていることが示唆されている。子どもたちは、日常生活習慣を整え、健康的な生活を送ることができる環境が整いにくい状況に置かれていにもかかわらず、現代の保護者の家庭における子どもの健康管理の仕方においては、①他力本願的態度、②知識優先、③個性差の無視、④“子ども”に対する無知、⑤過保護、などの問題が指摘されている⁴⁷⁾。

子どもの日常生活習慣を整え、健康的な生活の中で身体をつくっていくことは、子どもの成長発達を促し、最終的には子ども自身の生命を大切にすることにつながっていくと考える。子どもに生命の大切さを教えていくためには、健康であることの大切さを伝え、子ども自身がそれらの重要性を感じ、また喜びとしながら、自らヘルスプロモーション行動を遂行できるような看護専門職としての関わりが重要であろう。そして同時に、子どもの健康管理に重要な役割を担っている保護者に対してもまた、専門的知識を活用しながら子どもの健康を評価し、保護者に伝え共に喜ぶことや、適切な助言をしていく関わりが大切になってくるのではないだろうか。

VI. おわりに

本研究は、幼児期の子どもの関わっている専門職である保育者が、生命を大切にする子どもの心を育てるために、子どもと保護者にどのような関わりをしているのかということを知り、看護者が

どのような関わりができるのかを考えることを目的とした。252名の保育士および幼稚園教諭を対象にアンケート調査を行った結果、保育者は子どもにも保護者にも熱心に関わっていることが明らかになった。しかし、それらの関わりの特徴から、我々看護者の関わりの可能性として、健康問題に関わる専門職として、生命の始まり（誕生）と終わり（死）に関する関わりや健康問題に関する関わり、また保護者への関わりの大切さも示唆された。

本研究は、限られた地域で対象が選択されたことにより結果に偏りがあることは否めない。また、関わりの程度も、対象者の主観的判断によるため客観的に関わりの実態を評価できていないという限界もある。今後は、対象とする地域を広げたり、実際にどの程度の関わりをしているのかという客観的な評価ができる指標を用いて調査することなどが必要ではないだろうか。それにより、生命を大切にする子どもの心を育てるために、小児看護に携わる看護者が、子どもにどのように関わるができるのかについての新たな関わりの視点を持つことができるのではないだろうか。

<引用・参考文献>

- 1) 佐藤比登美, 齋藤小雪: 現代の子どもの死の意識に関する研究, 小児保健研究, 58(4), 515-526, 1999
- 2) 文部広報: 第993号, 平成10年5月29日
- 3) 原野広太郎, 小嶋秀夫, 宮本美沙子他編集: 児童心理学の進歩 1985年版, 219-246, 平井誠也, 浜崎隆司, 第9章 向社会的行動, 金子書房, 1985
- 4) 祐宗省三: 幼児期における愛他的行動(一), 児童心理37(10月号), 1920-1922, 1983
- 5) 祐宗省三: 幼児期における愛他的行動(二), 児童心理37(11月号), 2092-2105, 1983
- 6) 祐宗省三: 幼児期における愛他的行動(三), 児童心理37(12月号), 2279-2294, 1983
- 7) 菊池章夫: 向社会的行動の発達, 教育心理学年報, 第23集, 118-127, 1983
- 8) 社会法人恩賜財団母子愛育会, 日本子ども家庭総合研究所編: 警察庁生活安全局「少年非行等の概要」, 日本子ども資料年鑑2001, 331, KTC中央出版
- 9) 社会法人恩賜財団母子愛育会, 日本子ども家庭総合研究所編: 警察庁生活安全局「少年非行等の概要」, 日本子ども資料年鑑2001, 333, KTC中央出版
- 10) 社会法人恩賜財団母子愛育会, 日本子ども家庭総合研究所編: 文部省初等中等教育局「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」, 日本子ども資料年鑑2001, 352, KTC中央出版
- 11) 子ども年表(1998. 1~2000. 6), 日本子ども資料年鑑2001, 392-396, KTC中央出版
- 12) 社会法人恩賜財団母子愛育会, 日本子ども家庭総合研究所編: 文部省初等中等教育局「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」, 日本子ども資料年鑑2001, 339, KTC中央出版
- 13) 大日向雅美: 家族の揺らぎと親の惑い, 小児保健研究, 58(2), 155-159, 1999
- 14) 山下恒夫: 子どもという不安 情報社会の「リアル」, 37-64, 第一章子どもの変容 2家族の変貌, 現代書館, 1995
- 15) 柴野昌山: しつけの社会学 社会化と社会統制, 278-302, 第11章現代のしつけ状況, 世界思想社, 1995
- 16) 芹沢茂登子: 電話相談から見た子育ての悩みと不安, 現代のエスプリ, 342, 38-45, 1996
- 17) 牧野カツコ: 育児における<不安>について, 家族教育研究所紀要, 2, 41-51, 1981
- 18) 西村真実子, 津田朗子, 林千寿子他: 石川県における乳幼児の育児の実態と母親の意識, 小児保健研究, 59(6), 674-679, 2000
- 19) 江藤礼子, 畑山伊佐枝, 白川公子他: 育児の悩みと母親の社会的・心理的要因との関連(2), 小児保健研究, 60(2), 253, 2001
- 20) 光岡攝子, 堀井理司, 大村典子: 育児についての悩み・不安等の推移—山口県家庭教育充実事業ハガキアンケートの結果から—, 小児保健研究, 60(2), 253, 2001
- 21) 宮川八岐: 「生命尊重」の教育の充実—学校・授

- 業づくりの「5つの視点」一、初等理科教育No440, 10-13, 2001
- 22) 日下義明:「死の教育」の試み, 現代のエスプリ, 第394号, 39-47, 2000
- 23) 西本義之:「死」を考える学習ー地域の実情に合わせて, 現代のエスプリ, 第394号, 48-57, 2000
- 24) 金光一彦:『いのち』と向き合うということは……, 現代のエスプリ, 第394号, 58-67, 2000
- 25) 金森俊朗:私たちは奇跡的存在!ー小学校三年生と共に創る性と死=いのち・生の学び, 現代のエスプリ, 第394号, 68-77, 2000
- 26) 宮内浩二:「忘れられないご馳走」の授業, 現代のエスプリ, 第394号, 78-86, 2000
- 27) 斉藤章代:いのちをうけて, 現代のエスプリ, 第394号, 98-105, 2000
- 28) 種村エイ子:ブックトークで伝えるいのちのメッセージ, 現代のエスプリ, 第394号, 106-114, 2000
- 29) 三宅宣幸:「いのち」を考えるー聖書科の試み, 現代のエスプリ, 第394号, 115-126, 2000
- 30) 山口由美子:卵を用いた子育てシミュレーションーいのちと暮らしを守る家庭科での取り組み, 現代のエスプリ, 第394号, 127-136, 2000
- 31) 熊田亘:高校生と学ぶ死ー「死の授業」の一年間ー, 清水書院, 1998
- 32) 朝日新聞(平成13年10月2日付け), 月刊子ども論, 16(1), 37, 2001
- 33) 読売新聞(平成13年7月5日付け), 月刊子ども論, 16(10), 128-129, 2001
- 34) 工藤隆継:生と死をどう扱うか, 初等科理科教育, 30, 32-35, 1996
- 35) 保育所保育指針, 4-5, 厚生省児童家庭局
- 36) 幼稚園教育要領, 3, 文部省告示第174号,
- 37) 多田納育子:児童の生命観の発達に関する研究, 生物教育, 32(4), 253-261, 1992
- 38) 木谷要治:理科における生命観の教育の重要性, 理科の教育, 36, 9-14, 1987
- 39) アルフォンス・デーケン編集:死を教える, 64-82, 宮本裕子, 第二章 死への準備教育の場とそのあり方 幼児教育と両親の役割, メデカルフレンド社, 1997
- 40) 大日向雅美:なぜ迷う, 親たちー子育ての難しい時代, 児童心理, 53(11), 1-9, 1999
- 41) 巷野悟郎:現代子育ての問題点ー育児不安と子育ての支援の必要性ー, 周産期医学, 23(6), 769-771, 1993
- 42) 益守かづき, 岡本幸江, 中野綾美他:幼児期の子どものヘルスプロモーションー子どもの食事への母親の関わりに焦点をあててー, 第46回日本小児保健学会講演集, 240-241, 1999
- 43) 山村美枝:他児の死に直面した子どもへのかかわり, 小児看護, 21(11), 1484-1487, 1998
- 44) 原田紀子:子育てをしている母親のサポートグループを通したエンパワメント, 看護研究, 29(6), 497-508, 1996
- 45) 健やか親子21検討会報告書ー母子保健の2010年までの国民運動計画ー, 小児保健研究, 60(1), 5-33, 2001
- 46) 益守かづき, 中野綾美, 岡本幸江他:現代の子どものヘルスプロモーション, 高知女子大学看護学会誌, 24(2), 48-55, 1999
- 47) 高橋種昭:新時代の子どもの健康教育と保健指導指針, 24-30, 第4章子どもの健康管理ー健康づくりのためのしつけ教育ー, ライフ・サイエンス・センター, 1986